

審査の結果の要旨

氏名 近藤 僚

本研究は、大腸癌予後予測因子とされる **Immunoscore** を用いて閉塞性大腸癌の予後を評価した。閉塞性大腸癌と非閉塞性大腸癌、閉塞性大腸癌における **Bridge to surgery (BTS)** と手術単独症例（ストマ増設など行わず一期的に手術をおこなった症例）の比較を、**Immunoscore** を交えておこなった。**BTS** 症例におけるステント留置部位の病理学的変化を、**Immunoscore** を交えて比較し下記の結果を得ている。

1、大腸癌全体の **Immunoscore** を評価したところ、**Immunoscore Low / High** の割合は **66.3% / 33.7%**であった。次に閉塞性大腸癌と非閉塞性大腸癌の比較をおこなった。閉塞性大腸癌の **Immunoscore Low / High** は **78.3% / 21.7%**であった。非閉塞性大腸癌の **Immunoscore Low / High** は **54.3% vs 45.7%**であり、閉塞性大腸癌で有意に **Immunoscore Low** の症例を多く認めた ($p = 0.0251$)。

2、**Stage II / III** 大腸癌において、**DFS** は **Immunoscore High** で有意に長かった ($P = 0.0090$)。

3、続いて **BTS** 群と手術単独群の **Immunoscore** の比較を行なったが、両者の **Immunoscore** に差はなかった ($p = 1.000$)。

4、**BTS** 群と手術単独群の **DFS**、**OS**、再発部位を解析した。両者の **OS** ($P = 0.901$)、**DFS** ($p = 0.741$) に差はなく、再発部位にも偏りはなく肝転移の割合が一番多かった。

5、閉塞性大腸癌において、神経侵襲は **DFS** に関連がある因子であったが、**Immunoscore** は関連がある因子ではなかった。

6、続いて **BTS** 症例におけるステント留置部位の病理学的解析をおこなった。大腸ステント留置から手術までの期間は最短で **10** 日、最長で **81** 日であった (中央値 **28** 日)。28 日を基準として **Immunoscore** と再発との関係を調べたが、両者とも統計学的な差はみられなかった (**Immunoscore** $p = 0.146$ 、再発 $p = 0.261$)。

7、大腸ステント留置による機械的腸管圧排により生じる腫瘍周囲膿瘍と非腫瘍部粘膜潰瘍の有無や程度は、**Immunoscore**、再発の有無との関連を示唆しなかった。

以上、本論文は閉塞性大腸癌と非閉塞性大腸癌、**BTS** 症例と手術単独症例の **Immunoscore** を比較した新しい試みである。また、閉塞性大腸癌の予後は非閉塞性大腸癌と同等である事を示し、**BTS** 症例の予後を免疫学的側面からと病理学的変化を含めて評価し、**BTS** の安全性と有用性に関する知見を得られた。

よって本論文は博士（医学）の学位請求論文として合格と認められる。